伊丹公論

復刊
第8号
通巻27号

発行所
伊丹市立図書館ことば蔵
伊丹市宮ノ前3-7-4
☎072・784・8170
編集
伊丹公論編集委員会

植木産地・東野の伝統守れ

生産者が復活へあの手この手

伊丹市の北部に位置する東野地区は全国有数の苗木産地として知られるが、平成25年（2013）2月、ウメ輪紋ウイルスの緊急防除区域に指定され、特産品である南京桃やウメの生産中止を余儀なくされた。このことにより大きな痛手を被った生産者たちの復活へ向けた取り組みとは。

◀「たみまるレモン」と「たみまるレモン酒」（300ml 1 本 670 円、720ml 1 本 1, 460円）

▶オリーブ（右）とミカンの苗木＝久保農園（伊丹市東野）のヤエザクラの前で

全国有数の苗木産地東野

川辺郡稲野村東野地区（現伊丹市東野）の苗木業（種苗）が急速に進展したのは、明治中後期のこと。

明治維新後、政府は園芸業を勧業政策の一つとして奨励し、外国から種苗の輸入や新技術の導入を試みた。最初は、地質上の問題や虫害被害の発生、欧米の新技術に対する農民の反発などもあり、政府の奨励策は十分に定着しなかった。欧米農業の導入を伴う園芸業が日本に定着していく明治20年代以降、東野では苗木生産に適した気候・地質・風土、神戸や大阪といった大都市近郊に位置する好条件等を活かし、苗木の名産地として成長した。

ワシントンの桜

明治42年（1909）、当時の外務省の申し入れにより、日米友好の桜の苗木約2千200本が東京市からワシントンD・C・に送られた。しかし、この苗木には病害虫が多く寄生していることが判明し、現地で焼却処分となった。外務省は再び桜を送るため、静岡県興津（おきつ）（現静岡市）にあった農商務省農事試験場園芸部に苗木の育成を依頼し、この折り、桜の接木用台木苗の購入元として白羽の矢が立ったのが東野であった。全国でも定評のある苗木生産地であり、病虫害対策として、最新の青酸ガス燻蒸室を有していたこと等が理由と考えられる。

翌年12月、桜の台木7千500本が東野から興津の試験場に送られ、この台木苗に東京荒川堤の桜の穂木を接ぎ木し育成された桜苗が、明治45年3月、アメリカに送られた。これが、今なお国民に愛されているポトマック河畔に咲く「ワシントンの桜」である。

ウメ輪紋病の発生

この東野に、思わぬ災難が降りかかった。平成24年7月、市内で栽培されていたウメの苗から、ウメ輪紋病の発生が確認された。翌年2月には農林水産省令によりウイルスの緊急防除区域に指定され、主な生産品である南京桃やウメの苗木生産は中止された。また、昭和56年（1981）から東野の生産者が植栽等に協力し、ウメの名所となった緑ケ丘公園の梅林も今年3月、全て伐採された。

苗木産地再生へ

防除区域の指定が解除されるのは、最短でも平成30年。そこから、再び南京桃やウメの苗木を出荷できる状態まで育てるのに3～4年、東野の南京桃やウメが再び見られるのは最短で平成33年ごろになる。

危機感を抱いた東野の生産者たちは、苗木産地の伝統を絶やすなと、今まで以上にウメ、モモ以外の品種の栽培に力を入れ始めた。

すでに、着手していたマイヤーレモン（商品名「たみまるレモン」）やミカンなどの柑橘系果物、フェイジョア、オリーブなどの栽培を強化。また、ウメ輪紋ウイルスに感染した植物を処分した後の圃場（ほじょう）を使ってサツマイモの栽培を開始した。

これら東野産の果実を使った新商品も誕生。「たみまるレモン酒」は、地元の「伊丹老松酒造」と半年かけて共同開発された。味は同じだが色合いなどが理由で販売できないマイヤーレモンを活用し、日本酒とブレンドしたリキュールで、レモンと日本酒の風味が共に味わえる。伊丹老松酒造直売所（中央3）と農産物直売所「スマイル阪神」（北本町3）で数量限定販売している。サツマイモは、「たみまるほしいも」の名で商品化された。

もちろん、伊丹市の特産品として高い人気を誇る南京桃やウメの生産再開もあきらめてはいない。東野のウメ・モモ・サクラ等生産者の会会長の久保吉昭さん（51）は「また元通り、東野の特産品である南京桃やウメを出荷できるように頑張っていきたい」と力強く話す。

生産再開に向け、現在は貴重な品種を防除ハウスなどで保存する活動を続けている。東野の生産者たちの努力により、苗木産地・伊丹東野の南京桃やウメが再び伊丹の特産品として復活する日が待ち遠しい。

【参考文献】地域研究いたみ第43号

第3回

伊丹老松酒造　武内社長

特別寄稿

弊社「伊丹老松酒造」は江戸時代前期の元禄元年（1668）に創業いたしましたが、江戸時代の伊丹はどんな町だったのでしょうか。

村が集まり町場ができ、酒の町として栄えた伊丹郷町の一角にあった湊町（昭和51年の町名改正でなくなり、今は自治会名としてのみ存続）は、今の伊丹1丁目のあたりにあり、JR伊丹駅北側の阪神運転免許更新センターの近くには、駄六川を利用した船着場がありました。

かつて酒造業者は、馬の背に4斗樽（72リットル入）を左右に二つかけて、それを1駄と数えましたが、江戸時代の後期には、この船着場から6駄（12樽）を積んだ高瀬舟が行き来するようになり、そこからこの川は「駄六川」と名づけられたとも言われます。そして、その高瀬舟に積まれた酒樽は、駄六川から猪名川を下り、途中かの「樽廻船」に積み替えられて、海路江戸へと旅立っていきました。

この伊丹郷町から江戸へ出荷された清酒は、文化元年（1804）には22万7千樽にのぼり、江戸積酒造業は郷町を南北に走る本町通り（今の産業道路）などに軒を並べた酒造家を中心に大いに栄えました。同じ頃の郷町の戸数は2千戸余りで人口は8千人位、酒造家数は70人程で、米屋・樽屋などさまざまな酒造関係の商いも行われるなど、まさに酒の町としての繁栄ぶりがうかがえます。

そうした銘酒の香りに誘われて、井原西鶴、頼山陽などの著名な文人墨客が数多く伊丹の町を訪れました。伊丹の酒が特に売れた元禄時代、酒造業でにぎわう伊丹について西鶴は、「軒を並べて今の繁盛」「津の国の隠れ里」と書き記しています。

さて、伊丹郷町の北隅に、郷町全体の氏神である猪名野神社があります。祭神は猪名野坐大神（いなのにますおおかみ）。延喜4年（904）に、猪名寺からこの地に勧請されました。約1万5千平方メートルの境内には本殿と数多くのお社が並ぶほか、酒造家らが寄進した石灯籠が90基以上もあり、最も古いものでは寛永20年（1643）の銘が刻まれたものがあります。

かつては、毎年恒例の秋祭りの折、元禄16年を起源とする御神幸の行列が行われ、当時の領主の近衛家から寄贈された鉾や、牛に引かせた御所車、神輿などの行列が、天王町（現宮ノ前）の猪名野神社から本町通りを経て、大坂道を通り、猪名寺村（現尼崎市）まで巡幸していたと言われます。その様子を描いた「猪名野神社神幸絵巻」（全3巻）は市の指定文化財になっています。そして、昭和54年（1979）には、有岡城の主郭部とともに、猪名野神社の境内全域も有岡城の砦跡として国の史跡に指定されました。

第3回はここまで。汗ばむ季節には銘酒とともに心地よいそよ風を肌に感じながら、ほろ酔い気分をゆるりとお楽しみください。

「郷土研究伊丹公論」は、私立伊丹図書館を開設した小林杖吉（筆名「丹城」）が、昭和11年（1936）1月20日に創刊し、19号まで発行された地域紙。ことば蔵では、伊丹公論を73年ぶりに復刊し、伊丹の歴史・文化を全国に発信するため、市民と共に発行している。